

『神が恋する男』

著：六堂葉月

ill：高嶋上総

雑誌記者・望月康孝。二十八歳。

人目を惹くスラリとした長身に、女受けする甘いマスク。顎に生やしているトレードマークの不精髭は、出版界という不摂生な業界にいてもだらしなさというより、男としてのワイルドな魅力を醸し出していた。自他ともに認める色男、そしてタラシだ。

芸能界・政財界のゴシップで世間の話題をさらう週刊誌『YAMATO』の編集部の中でも、望月の強引な取材は特に抜きん出ている。

火のない所にも煙を立てる男――と、同業者の間では囁かれ、一目置かれる存在だ。

次号の締め切りを控えて慌ただしい編集部に、今日は一際けたたましく電話が鳴り響いていた。

本日発売の今週号で、人気絶頂の女性アイドルの初スキャンダルを独占スクープで望月が見事スッパ抜いたのだ。

可憐なアイドルと背の高いモデルふうの男が、深夜の路上でディープキス。そしてホテルの部屋へと消える密会の写真が、数頁にわたってしっかりと掲載されていた。

相手の男の顔は微妙な角度できちんと写っておらず身元は不明だが、アイドルは本人と確認できる確かな写りだ。

TVのワイドショーの芸能ニュースは、朝からその話題で持ちきりだった。

そして独占スクープを掲載した編集部では、夢を砕かれたファンの苦情やら、問い合わせやらの電話が鳴りっぱなし状態なのだ。

よくも悪くも世間の反響が大きければ、雑誌の売り上げはもちろん跳ね上がる。

この記事仕上げた望月は、ご機嫌な女性編集長のデスクの前に呼び出されていた。

「それにしても、本当によくこんな写真撮れたわね。行動にもちゃんと裏付けが取ってあるし。これじゃ事務所側も何も言えないわ。今夜、記者会見開くみたいだね」

雑誌を片手に感心している年上の女編集長に、望月はサラリと答える。

「だって、その相手の男は俺ですからね」

「えっ、そうなの？」

驚き、眼をパチクリと瞬く編集長に、望月は不精髭のある顎を軽く擦りながら悪びれず笑った。

「結構、墮とすのは簡単でしたよ。事務所のガードは堅かったですけど、それさえ潜り抜けりゃー本人は今時の女の子。貞操観念もクソもない」

そう、望月は正体を隠してアイドルに接近し、自らタラシ込んでこの記事仕上げたのだ。

一時とはいえ恋人同士だったので、プライベートに詳しいのは当然だった。

それに隠しカメラの性能もよくなってきている。あらかじめセッティングしてある場所にエスコートすれば、第三者が撮ったようなこんな写真はいとも簡単に撮れてしまうのだ。

嘘をでっち上げたわけではないから、アイドルが所属する事務所も掲載したこちらに強いことは言えない。

今頃はこのスキャンダルをどう利用し、好感度を落とさずにいられるかという弁解を考えるのにやっきになっているだろう。出版界以上に、芸能界もしたたかなのだから。

(アイドルの恋人ってシチュエーションも、悪くはなかったけどな)

望月も、記事にさえしてしまえばもう用はない。

望月にとってこの恋は人形遊びのようなものである。いくら最高級にかわいいアイドルであっても、本気の恋でなければ、未練などまったくなかった。

「……さすがね。相変わらずえげつないこと」

編集長はやれやれとため息をつくが、無論まんざらではないようだ。

「それって、当然褒め言葉ですよ？」

「もちろんよ。これからも頼りにしてるわ」

悪代官と越後屋のように腹黒く微笑み合う。

人の弱みを利用し記事にする、ここはハイエナたちの集う編集部なのだ。

「じゃ、俺は休暇に入りますんで。臨時ボーナス、振り込みよろしく」

望月は軽く手を振って、編集部を後にした。

飄々としたライフスタイルも、望月の個性の一つだった。

眩しい初夏の日差しに、朝の海はキラキラと輝いていた。
心地よい海風。広大な海原を快調に進む船のデッキで望月は一人煙草をふかし、大きくため息をつく。
「青い海、白い雲——これが女連れのバカンスだったら最高なんだけどな」
しかも乗っている船はクルーザーなどではなく、ただの漁船だ。
急に舞い込んだ取材依頼で、望月は休暇を取りやめて、観之島という離島に向かっていた。
三重県のある港から船に揺られて約一時間。水平線には緑の島影も見えてきて、間もなく目的地に到着しようとしている。

（さっさと終わらせて、東京に帰ろう）

アイドルのスcoopの五倍という破格の臨時ボーナスに誘惑され、こうしてやってきたが、離島での取材など退屈なものになることは間違いなかった。

一応離島ということで、滞在に困らない程度の用意はしてきたが、大自然より都会の喧噪のほうが自分の性に合っていると思う望月は少々不安だった。

望月を観之島まで送ってくれる、気のいい中年の漁師が尋ねてくる。

「あんた、柊杞様にお会いするのは初めてかい？」

「はい。初めてです」

（柊杞様...ねえ）

望月の今回の仕事は、その『柊杞』という人物の取材だ。

観之島では、独特の宗教が信仰されていた。それはなんと『現人神』を奉るという、非常にマニアックな風習だった。

平成となって久しい現在も、島民はもちろん近隣の漁師も熱心に現人神を信仰しているそうなのだ。

手厚く奉られている神の名前は『柊杞』というらしい。年齢も性別も今のところ不明だ。

だが、カルト的な宗教の教祖には中年男性が多いので、おそらくそうだろうと望月は予想している。

現人神が男でも女でも中年でも老人でも、取材さえすれば記事を書くのに支障はない。

事前調査によれば、過疎の離島のせいか島民は高齢者ばかりだ。ニュースで世間に名を轟かす金欲に塗れた宗教団体とは、あまりにも形態が違うのはわかっていた。

彼らは周囲の綺麗な海を利用し真珠の養殖や漁で生計を立てている、素朴で善良な信者たちなのだ。

しかし、それを承知で望月はあえて取材にやってきた。社会問題として、悪意を持って派手に大きく取り上げるために。

無論、それには理由がある。理由というより、裏事情と言ったほうが正解かもしれない。

美しい自然の残るこの島に、国と第三セクターからリゾート開発の話がまだ非公式にだが出ているのだ。

その工事を請け負うことにほぼ内定しているのが、官僚や政治家と癒着している大手建築会社『津村建設』だった。

この不景気にリゾート施設など建設しても利益など出るはずもないが、官僚や政治家と癒着し工事費で利益を得ることが津村建設の目的なのだ。その後のリゾート運営の赤字には、建設側はまったく関係ないという悪質な利潤目的の計画だった。

ビッグマネーの動く所には、それを貪ろうとする亡者が集う。公費とはいえ、いや公費だからこそ、不景気には美味しい仕事になるのだ。

だがこのリゾート開発を、自然の恵みとともに暮らす保守的なこの島民は受け入れないだろうということは、火を見るより明らかだ。

だから津村建設は望月にこの島独特の風習である『現人神』社会教問題として大きく取り上げさせ、世間的に島民をこの島に住みづらくし、リゾート開発の交渉を容易にしようとする目論んでいるのだ。

取材費はもちろん、望月への破格のボーナスも津村建設が払ってくれることになっていた。

悪意に満ちた記事を書くための取材だ。火のない所に煙を立てる男にとっては、まさに十八番の仕事だった。

津村建設も望月の実力を知って出版社に指名で依頼してきたのだから、金払いはいい。

暴行傷害事件や悪質な靈感商法で摘発されるいかがわしい宗教団体にはこと欠かないご時世だ。この島の現人神信仰に悪意の脚色を施し大袈裟に書き立てればば、雑誌は飛ぶように売れるだろう。出版社もホクホクなのだった。

小さな湾のなかにある真珠の養殖用の筏の一群の間を擦り抜け、漁船は午前中に観之島へと到着した。まだ日は高く、間もなく昼になるうかという時間だ。

今日中に取材を終えるには、充分だった。

今回は取材したという事実や数枚の写真が必要なだけであって、後は東京に戻ってからさも怪しい集団であるかのように大袈裟に書き上げればいいだけだ。だから望月が持ってきた取材機材は、安いデジカメとレコーダーくらいだった。

「日が沈む頃には、また迎えに来てやるよ」と告げる漁師に礼を言い、望月は簡素な木の棧橋がある船着き場で漁船を降りた。そして、山へと続く道をゆっくりと歩き始める。

現人神がいるという屋敷までは、一本道と聞いている。事前にアポは取ってあるし、何も問題はない。小さなこの島はほとんどが山で占められているようで、見えるのは真珠の加工工場と、緑の木々の間から覗く数軒の民家の屋根くらいだ。

予想はしていたが、やはりとんでもないド田舎だ。

道は舗装もされていない砂利道。店などは、船着き場のすぐ近くに赤電話が置いてある煙草屋兼雑貨屋らしい小さな商店が一軒あるだけだ。錆びた看板に年季を感じた。

（昭和にタイムスリップってトコだな）

一本道に沿って山の方角へ進むと、やがて大きな門が見えてきた。まるで寺院の入り口のような屋根のある立派な木の門がある。どうやらここに間違いないようだ。

門は開いており、望月がその中へと入ると、整然とした竹林が広がる美しい庭になっていた。まるで新緑の京都に来たかのような趣だ。

そして門を入ってすぐの所に、茅葺き屋根のいかにも田舎の風情漂う古ぼけた民家があった。民家の玄関は開いているが、ひっそりとしていて人けはない。

さすがにこんな庭の入り口に現人神が住んでいるとは思えないので、おそらく信者か誰かの住まいだろう。

「すいませーん」

とりあえずそう声はかけたが、静けさはそのままなんのレスポンスもなかった。

立派な敷石は竹林の奥へと続いているし、目指す屋敷はこの奥にあるらしい。

望月が民家の前を通り過ぎ、奥へと歩いていくと、

「――待てっ、何者だっ」

民家の裏側から飛び出してきたらしい白髪の老人が、望月を呼びとめる。

老人は振り返った望月を見やり訝しげに顔を顰めているが、望月はニコリと愛想よく微笑んでみせた。

「東京から来た、雑誌『YAMATO』の望月です。柊杞様にお話をうかがいに来ました」

「.....」

しかし老人はさらに険しい顔でジロリとこちらを睨んでくる。

「あの、取材のこと...ちゃんと事前に連絡済みですよ？」

今回の取材の真意を彼らは知らないにしても、普通の取材としてちゃんとアポは取ったはずだ。

すると、老人は一言低く告げてきた。

「...柊杞様は、お会いにならん。帰れ」

「えっ、どうしてですか？」

「体調がすぐれんのだ。他所者には当分お会いにならん。迎えの船を港に呼んでやるから、とっとと帰れ」

「でもっ」

「うるさいっ、帰らぬと言うなら、力づくで島から追い出すぞ！」

玄関に戻った老人が手にしたのは、なんと薙刀だ。ギラリと光る刃先を突きつけられて、望月は慌てて後ずさる。

「わかりましたっ、帰りますっ、帰りますっっ」

そのまま逃げるように門の外に出ると、大きな門は音を立てて閉められてしまった。ご丁寧に門までかけたようだ。

「...ったく、なんだよ。いきなり取材拒否か？ しかも薙刀...時代錯誤もいいところだ」

（こりゃ、神様ってのはかなりの老人かもしんねーな）

東京を出る時には確かに取材の許可は下りていた。こんな急に体調を崩すとなると、高齢者の可能性が高い。もちろん体調不良を取材拒否の口実にしているだけかもしれないが。

しかし、せっかく来たのに、このまま収穫なしで帰るわけには当然いかなかった。

望月は顎の不精髭を撫で、ニヤリと口端を上げる。

「――ジャーナリストを、甘く見てくれるなよ」

正面が駄目なら、裏がある。山を越えた反対側からなら、現人神の住まう屋敷に直接近寄れるはずだ。

強引な取材はお手のものの望月は不敵な笑みを浮かべ、島を回り込むように山の反対側へと向かった。

「まさか、山歩きをさせられるとは思わなかった.....くそっ」

望月は今は東京で生活しているが、中学までは山間の村で育った。だから山道は多少慣れてはいるし、着替えとわずかな機材しか入っていないバッグは重くはない。

だが、さすがに日頃の不摂生と運動不足がたたたり、思わずボヤきたくもなる。

観之島は小さな島であり幸いにも山は低く、一時間ほどで越えることはできたが、目的の屋敷にだいぶ近づいたと思う頃にはすっかりバテバテの状態だった。

「ちょっと、休憩するか」

望月は倒木に腰掛けると、胸ポケットから煙草を取り出して一服する。

周囲は人間が手をつけていない森。こんなふうには森林浴をするのは十数年ぶりだ。

木々の緑が初夏の風に揺れる中、夢中で走り回っていた子供の頃を思い出し、望月は懐かしさに苦笑した。

（でも、ここもリゾート開発が始まっちゃったら、何もかも変わっちゃうんだろーな）

工事の利権だけが目的のリゾート開発。

ほじくり返すだけほじくり返して、いざ建築物が完成したとしても、経営は大赤字ですぐに閉鎖されるのが関の山だ。

そんなふうにして放置された「箱もの」と呼ばれる施設が、日本中に何十カ所もある。税金の無駄遣いだけでなく、明らかな自然環境の破壊だ。

何十年、何百年という年月をかけて生み出された美しい景観や絶妙なバランスの上になりたっている生態系が、人間のエゴによって一瞬で失われてしまうのだ。そして二度と元の姿には戻らない。

（――まっ、俺には関係ねーがな）

人生楽しく生きるには、何につけても金が必要だ。

報酬を目当てに業者に加担している自分は、同じ穴のムジナだ。彼らを責める気もないし、稼がせてくれるなら、むしろ結構なことだった。

何も知らないこの島民を陥れることにも、望月はなんの罪悪感も感じなかった。

煙草を一本吸い終え、ふと気がつけば心地よい水音が聞こえてきていた。どうやらこの近くに滝があるようだ。

喉の渇きを覚えていた望月は、立ち上がりそちらの方へ歩いていく。

するとそこにはやはり清流があり、高さ三メートル程度の小ぶりの滝があった。

岩場から流れ落ちる澄んだ水は、光の加減で虹を描いている。まさに自然の芸術だ。

木の生い茂る斜面を下りようとした望月は、ハッと滝壺に目を留める。

（誰か、いる――！）

滝壺には、白い湯帷子を着た青年が一人いた。望月は反射的に木の陰に隠れ、こっそりその様子を窺う。

キラキラと輝く滝の水飛沫を浴びて、濡れた髪を両手で掻き上げるような仕草を繰り返す端正な顔立ちの青年。

濡れた身体にピッタリと湯帷子が纏わりついている。白い布地に肌が透けて、なんとも言えないなまめかしさだ。

「...っ」

思わず望月はゴクリと息を呑む。

性別というものを超越し、人間はここまで美しく清廉な雰囲気醸し出せるものなのか。

自然の中に佇む青年のあまりにも美しい姿に、その光景がまるで一枚の絵画であるかのような錯覚すら覚えた。

初夏とはいえまだ水浴びには少し早いように思えるが、普段からここでこうしているのか慣れた仕草で心地よさそうな表情を浮かべている。

これも色気というのだろうか。女性とは明らかに身体のラインが違うというのに、望月は沐浴する青年からすっかり目が離せなくなってしまった。

この島民は老人ばかりだと思っていたが、青年は二十歳そこそこに見える。

（彼も、信者なのか？）

一番美しく見える年頃とも言えるが、同性を相手に望月がここまで心を奪われたのは生まれて初めてだった。

青年の写真をデジカメで数枚撮り、らしくもなくそのまま見惚れていたなら、

「うわっ」

斜面で不安定な足元に、つい体勢を崩してしまった。

長い脚でなんとかバランスをとって転びこそしなかったものの、思いきり滝壺の前に飛び出していきような形になってしまう。

突然の望月の登場に、青年はさぞかし驚くだろうと思った。だが、かなり肝が据わっているのか、まったく動じない。

眉一つ動かさずにこちらを見つめ、尋ねてくる。

「――誰だ、お前は？」

響きのよい、凜とした声だった。

「実は...道に迷ってしまって」

望月が苦笑しつつそんな嘘の言い訳をすると、離れた所から見ていたのか、老人が駆け寄ってくる。

手には薙刀。門のところで望月を追い返したあの老人だ。

「柊杞様っ！」

(...柊杞様?)

なんとこの青年が、現人神の柊杞らしい。

(まさか、こんな若い男が?)

確かに神々しいようなカリスマ性はあるが、予想しなかった若さと見目の麗しさに、さすがの望月も驚きを隠せなかった。

老人は刃を望月の方に突きつけ、鬼の形相で今にも斬りかからんばかりにジリジリと詰め寄ってくる。

「この不届き者めっ！ 断りもなく柊杞様の御前に現れるとは、もうただではおかん！」

すると、すぐに柊杞がそれを諫めた。

「佐吉、かまわない。道に迷ったと言うのだから仕方がないだろう」

「ですがっ」

こんな小さな島で道に迷うというのは、あまりにも不自然だ。不審に思われて当然だった。しかも望月は取材を申し込んでいた記者なのだから、勝手に侵入してきたに違いないと、普通は思うだろう。

だが、柊杞は望月を疑っていないようだった。淡々と佐吉と呼んだ老人に告げる。

「せっかく来たのだ。客人として扱ってやれ」

「お加減は、もうよろしいのですか？」

「.....滝に打たれて、だいぶ楽になった」

「かしこまりました」

絶対服従のようだ。何しろ彼らにとって柊杞は神様なのだから。

佐吉という老人は、柊杞の従者のようなものらしい。

(でも滝に打たれてよくなるって、いったいなんの病気だ?)

ここまで来て追い返されないのはありがたいが、そんな疑問が残る。

柊杞が水から上がると、佐吉が手拭いで柊杞の身体を丁寧に拭く。慣れた様子で拭いてもらいながら、柊杞が望月に尋ねてきた。

「お前、名は？」

やはり相手は神様、こちらを完全に見下した物言いだ。

柊杞は明らかに年下であるし、その口ぶりは望月には生意気としか思えなかったが、後の取材を考えて機嫌を損ねてはいけないと、望月は丁寧にかしこまり、答えた。

「望月康孝と申します」

「そうか、望月か。山で迷っていたというなら昼食もまだだろう？ 佐吉、用意してやれ」

「はい。かしこまりました」

態度は横柄な感じだが、柊杞の性格はそれほど悪くはないようだ。

(美人っちゃー美人だし、どこか色っぽいっちゃー色っぽいんだけどよ。男だしな...)

多少の滞在がOKになったのは嬉しいが、柊杞が女だったらもっと楽しいことになったかもしれないと、望月は柊杞のまだしっかりと濡れている身体を見つめ、内心でため息をついた。

千坪以上ある大きな日本家屋など、京都で重要文化財になっているものか、もしくはヤクザの大親分の屋敷くらいでしかお目にかかれないだろう。

山まで続く庭を入れたら、もうどれくらい敷地の広さがあるかわからない。柊杞と出会った滝までを庭としても、おそらく東京ドーム二つ分以上は余裕であると思われる。

実際、この観之島全体が柊杞の私有地なのだ。

本州側から船で約一時間で来られることから、真珠の加工工場などで働く者は通いの者が多い。だが柊杞のこの屋敷には、中年から老人の十数人の男女が住み込みで働いているようだった。

屋敷は築百年以上のようにかなり古いが、掃除などは完璧にされ、その美しい趣はまさに日本の美といった風情が感じられる。

本邸から渡り廊下で繋がっている離れが、客人用に建てられたものらしい。

高級和風旅館のような和室は、木材に高級な桧を使い、美しい襖絵や掛け軸で飾られていた。そこで望月は海の幸をふんだんに使った和食を御馳走になる。

この離島で、屋敷といい庭といい、贅を尽くしたこれだけのものを維持するとなると当然かなりの経費

がかかると思われる。

だが彼らは真珠の養殖や漁業でしっかり生計を立てているので、金策には苦労せず、収入も安定しているのだろう。

信者の献金で収入を得ようとする宗教団体だと、どうしてもマルチ商法のようになってきて、叩かなくても黒い噂が出てくるものだ。

この島に来る前に漁協などで話を聞いてみたところ、真珠の養殖事業も柊杞を会長兼社長にし、ちゃんと有限会社として経営している。実にしっかりとした島民たちだ。

(現人神って一のさえなけりゃ、ぜんぜん普通なんだけどな)

自然に囲まれた美しい島。そこで育った天然真珠のように美しい白い肌の、現人神。確かに神話の世界のようだ。

しかし、もちろんジャーナリストであり超現実主義者の望月は、鼻で笑いたくなる。柊杞の性別を越えて人を惹きつける、あの麗しさだけは——認めてもいいが。

ともかく、自分の使命は彼らを陥れる記事を書き、この島で滞りなく津村建設の工事が始まるようにすることだけだ。

食事が終わった頃を見計らったのか、佐吉が望月を呼びに来た。

「柊杞様が、お前と話をしたいそうだ」

「それって取材OKってことですよ？」

ことが順調に運び微笑む望月を、佐吉は不満げにジロリと睨む。

「もし柊杞様に失礼なことをしでかしたら、直ちに追い出すぞ」

「そんなことはしませんって」

取材の真の目的が目的なので、適当な質問をしてそれなりの格好を保てばいいだけだ。望月に気負いはまったくない。

佐吉の後に続き、渡り廊下を通る。赤、白、紫や橙のツツジが見事に咲き誇る美しい庭を見つつ、いよいよ本殿に入る。

木目に顔が映りそうなほど磨き上げられた艶やかな廊下といい見事な彫刻の施された欄間といい、離れ以上に立派な造りだ。ここに現人神が代々住んできたのだろう。

美しい花鳥風月の描かれた襖を佐吉が跪いて開き、これまでで一番豪華な和室へと通された。

奥には御簾が下りており、そこに柊杞が来るらしい。

入り口の所から佐吉が「正座し、頭を下げて待っている」と伝えてくる。

(はいはい。わかりましたよ)

思ったより面倒な取材に内心でため息をついた望月は、言われたように正座で座わり、頭を下げた。

すると、こちらとの間を仕切っていた御簾がゆっくりと上がる気配がする。まるで時代劇で將軍様に家臣が拝謁するようなシチュエーションだ。

御簾が上がると、聞き覚えのあるよく通る声で「顔を上げろ」と声がかかる。

言われるまま顔を上げると、高座には柊杞が座っていた。

滝で会った時は湯帷子だったが、神様なのだから、いったい普段はどんな格好をしているのかと興味があった。

しかし柊杞は、白いシャツにスラックスというあまりにも面白みのない清楚な服装だ。

おそらく、柊杞に仕える年配のご婦人が選んでいるのだろう。

(皇室ファッションと通じるものがあるな)

でもそれが美しい顔立ちと姿勢の正しさと相まって、柊杞の溢れる気品をさらに際立たせていた。

初めてここに通される島民や信者は、柊杞から十分に神聖なカリスマを感じるだろう。

不謹慎と自覚している望月は、ひたすら呆気に取られるだけだが。

しかし、嘲るような態度は許されない。入り口すぐの下座には、佐吉が控えていた。薙刀もすぐに手の届く場所にある。

正式に招かれているとはいえ、ここで『自分が神様だなんて、本気で思ってるのか?』などといった発言をすれば、今度こそ串刺しにされて海に投げ込まれるだろう。

柊杞が声をかけてくる。

「望月、お前は記者だそうだな？」

澄んだ瞳でこちらを真っすぐに見つめ、興味津々といった感じだ。これではどちらが取材対象かわからない。

「まあ、一応」

望月が苦笑を交えて答えると、柊杞は少し声を強くして問い返してきた。

「一応というのはどういうことだ？ 完全な記者ではないということか？」

神様は、どうやらはっきりしない物言いや曖昧な言葉は嫌いらしい。

真っすぐにこちらを見つめて問いただしてくるのは、正直さからかもしれないが。

機嫌を損ねられても困るので、すぐに望月は言い直した。

「雑誌『YAMATO』第一編集部の記事です。これが名刺です」

名刺をスッと畳に置くと、佐吉がそれを拾い柊杞に差し出す。それを一瞬チラリと見やっただけで、すぐに柊杞は佐吉に名刺を返してしまった。

「そうか。最初から素直にそう言えばいい」

(つつく、偉そうに)

完全にこちらを見下した態度や物言いには、やはりカチンとくる。報酬のいい仕事でなかったら、バカバカしくてやっていられないところだ。

望月の内心も知らず、納得したらしい柊杞が続ける。

「今朝は気分がすぐれなかったが、もうだいぶよくなった。答えられることなら答えてやろう」

ドタキャンしようとしたことに対しては、当然のように詫びの言葉はない。まあ、不法侵入したこちらもちろめであるが。

「では、さっそく。柊杞様が現人神になった経緯を教えてください」

「わかった」

望月は持ってきたレコーダーは取り出さず、筆記用具のみで取材を始めた。どうせ適当に書くのだから、メモと頭で覚えられただけで十分に思えてきたのだ。

柊杞の話によると、彼の年齢は二十一歳。

この島の現人神の歴史は古く、なんと室町時代から五百年近く続いているらしい。

現人神は男性だけで、先代の神は柊杞の曾祖父にあたり、『槐珠』という名であったそうだ。

神の名は、樹木の名から一字と音を取るといふ。

柊杞は、過去に遡り延々と神の名をつらつらと語っていたが、望月には過去の神の詳しい名などどうでもよかったので、メモを取るふりだけして聞き流していた。

男が受け継いできた観之島の現人神の座だが、御子に男児が生まれにくいという血統らしく、槐珠もついに男児には恵まれなかったそうだ。

その後、二世代を経てようやく生まれた直系の男児が柊杞だという。

柊杞が生まれた時に、すでに槐珠は亡くなっていたので、柊杞は生まれたと同時にこの島の神になったと誇らしげに語った。

だいたいのあらましはわかったので、望月は続けて質問する。

「では、柊杞様のご両親は、今はどうしているのですか？」

すると、柊杞はきっぱりと強い口調で返してきた。

「私はこの島を守る神として生まれた。ゆえに人間のように、両親などは存在しない。女の腹を借りて天下りしてきたのだ」

「そう...ですか」

(人間、狼に育てられれば狼になっちゃうからな)

生まれてすぐここで神様として育てられた柊杞は、すっかり身も心も神様になってしまったのだろう。

これは人格形成において問題だ。誇大妄想というか自己認識の錯誤というか、誠に気の毒な状況である。

(ある意味天然？でもこんなの、なんか昔にコントや映画であったなあ)

自分を神様だと思っている男。そんなのは、滑稽でギャグでしかありえない。

しかし、柊杞本人は心の底から本気で真剣に、自分を神様だと思っているのだ。

神様コントを思い出し、つい笑いが込み上げそうになったのを望月は堪える。顎髭を撫でるように口元を押さえて柊杞に言った。

「すみません。足、崩していいですか？」

慣れない正座をするのも、そろそろ辛くなってきた。しかし何よりも、この取材がバカバカしく思えてきたので、とてもきちんと正座で聞いてなどいられないのだ。

だが、途端に佐吉が大声で怒りだし、薙刀を手に詰め寄ってきた。

「柊杞様に何を言うっ、この無礼者がっ！」

だが、柊杞はそれをやんわりと制する。

「かまわない。東京の者は正座に慣れていないのだろう」

「しかし、柊杞様の御前で足を崩すなど」

「よいではないか」

柊杞は望月に破格の待遇をするつもりらしい。それを感じた望月は、佐吉に不敵に笑ってみせる。

「男の胡座は、それほど大きく作法から外れてないと思いませんか？」

「.....」

望月に苦々しい顔を見せて佐吉は黙り、再び下座へと戻っていく。すべての決定権は柊杞にあるのだ。

望月は柊杞の一日の行動を聞いたりして、取材を進める。

この島には照明以外、ほとんど電気製品がない。基本的には日の出とともに起きて、日没後しばらくして眠るといふ、夜遊び好きの望月にとってはゾツとするような生活を送っているらしい。

一番重んじているのは、先祖である神々へ祈りを捧げることだ。

一日三回。柊杞の言うことを簡単に要約すれば、島民や日本国民、そして世界平和のために祈っているらしい。ご苦労なことである。

そして、柊杞に祈りを捧げに来る島民に応じてやるのも、神としての大切な務めだという。

プライベートな時間は、書道に勤しんだり、森の散策や古武術で身体を動かしたりしているそうだ。

やはり会社経営のほうは、名ばかりのようだ。本人は祈りを捧げたり、捧げられたりしているだけで、他所からお金が確実に入るのだからうらやましい限りだ。

「写真、撮らせてもらっていいですか？」

望月が持ってきたバッグからデジカメを取り出すと、そこでまた佐吉に口を挟まれる。

「写真など、とんでもないっ！」

古い迷信が残っているのか、佐吉は写真をあまり快く思っていないようだ。魂が抜かれるとでも思っているのかもしれない。

しかし、柊杞は興味津々に瞳を輝かす。

「堅いことを言うな。私は一度、写真というものを撮られてみたいと思っていた」

「ですがっ」

口うるさい佐吉を柊杞は見やり、厳しい口調で言い放った。

「私がかまわないと言っているのだ。佐吉、お前はもう下がっていい。私は望月と二人で話したい」

「柊杞様...っ」

「私の言うことが聞けないのか？」

きつく強い声で再度告げる柊杞に、

「...申し訳ありません」

佐吉は深々と頭を下げて、静かに部屋を出ていった。

二人きりになると、なんと柊杞は自ら高座から下りて望月の持つデジカメを覗き込む。

「それがカメラか？」

デジカメどころか、写真機自体を初めて見るようだ。

「そうです。高座の方にお座りになった写真を撮らせていただきたいので、お願いします」

「わかった」

柊杞は、今時証明写真でもそんなカチコチにならないという緊張ぶりで座った。

(滝壺で勝手に撮った写真のほうが、いい顔してたなあ)

望月はなんとも言えないおかしさを必死に堪えて、数枚撮影する。

撮った写真を画面で確認できることに、柊杞はさらに驚いたようだった。

「面白いものだな。私にも撮らせろ」

なんだか幼い子供にせがまれているような気分になりつつ、望月はデジカメを渡す。

「...どうぞ。画面を見て、ここを押してください。すると収まりますから」

「そうか」

柊杞は嬉しそうに、望月や部屋のあちこちをかまわず撮り始める。

デジカメでよかった。もしこれが昔のようなカメラで、フィルムの現像を写真部に出したら、無駄遣いするなと確実に怒られただろう。

「気に入ったぞ。褒めてやろう。機会があれば、積極的にこうしたものに触れてみたいと思っていたのだ。神として、人間の使う便利なものには興味があるからな」

柊杞がこの上なく偉そうにデジカメを返してきた。かなり満足したらしい。

「それに年の近い者と話すのは、実に久しぶりだ。——嬉しいぞ」

望月の顔を見やり、本当に心から浮かべる極上の微笑。

(うわっ)

柄にもなく、ドキンッと心臓が跳ね上がる。アイドルに微笑まれても心一つ動かなかったというのに、こんな自分はいない。

望月は照れを隠すように咳払いをすると、柊杞に尋ねる。

「久しぶりって、どのくらいですか？」

「十年と四十三日になる」

(細かい性格してんな。この神様)

普通は日付までは答えない。さっと日数の計算ができるということは、頭の回転はかなり速いのかもかもしれないが、やはり変わり者といった印象だ。

望月は改めて聞いてみた。

「島から出たことは？」

「ない。島から出ると不浄なものに塗れると言われている」

「なら、出たいと思ったことは？」

「.....」

明かった表情が途端に曇り、柊杞は黙ってしまった。そしてゆっくりと高座へと戻ってから答える。
「...先代の槐珠様もそうであったように、私も神として島民のために、この島で一生を終えるのが在り方だと思っている」

「そう、ですか」
(――一生この島にねえ...)

先代が生まれたのは、おそらく明治時代。その頃のこの島など、江戸時代とそんなに大きく変わらない生活だろう。

一生を島で終えるのも、当時ならごく普通のことだったかもしれない。現代とは生活様式も感覚もあまりにも違うのだから。

なんの遊びをするどころか、同世代の人間とほとんど話を交わすことすらなく、柊杞はこの島で一生を終えると言う。

(いくら金があったって、使う場所も、使い方も知らねーんだよな)
これでは正直監獄と変わらない。

どんなに島民に敬われていても、宿命という籠の中のカナリアだ。

しかし、それを当然とするこの若い現人神が、望月にはひどく哀れに思えた。

年老いた女中が持ってきた茶請けの菓子などを一緒にいただいたりしているうちに、たちまち時間は過ぎていた。面白みのない取材と意思つつも、いつしかすっかり夕方が近づいて、部屋には障子越しに西日が差し込んできている。

そこに、佐吉がやってきた。

「望月さん、迎えの船が来ています」
さっさと帰れと、そういうことらしい。

「わかりました。今行きます」

もちろん望月にとっても、取材はもう充分だった。後はいかようにもデコレーションするだけだ。

メモなどをバッグにしまい望月が立ち上がると、

「待て、望月」

高座から柊杞がそれをとめる。

「お前にこの島での滞在を許してやろう」

(はぁ?)

まるでこちらが願い出たかのような言葉を使っているが、そんなことはもちろん一言も言っていない。明らかに望んでいるのは柊杞のほうだった。

横柄な性格。神としてのプライド。それでいて、素直な純朴さがそう言わせているのだ。

こんなつまらない田舎の島に、頭の少タイカれた神様。まして、口うるさい従者つきだ。

これ以上どうしてもつき合わなくてはいけない理由はない。あまりにバカバカしすぎる。

しかし、佐吉や老人たちがギロリと望月を睨んでいた。柊杞の厚意を断るなど、絶対に許されないことらしい。

望月のことは不満でも、柊杞の言うことは絶対なのだ。

もちろん無視して帰ってもいいのだが、望月はそうしなかった。

「...そうですか、ありがとうございます。では、お言葉に甘えて、もう少しおそばにいらしてまいしよーかね.....ははっ」

数日分の着替えなども持ってきているし、苦笑しながらそう答えると、柊杞は満足げな顔をしてこちらに頷く。

「少しとは言わず、好きなだけいればいい。私はかまわない」

(そりゃー、お前はそーだろうよ)

どうやら、本格的に気に入られてしまったらしい。望月のことが珍しくて、関心が尽きないのだろう。

(年の近い相手と話すのは、十年ぶりって言ってたからな)

近いといっても七歳も違うのだが、柊杞の周囲はほとんど老人ばかりで、若者は誰一人いないのが現状だ。

――もしかしたら、無意識に友達を欲しているのかもしれない。

(でも、俺にそれを求められても困るんだよ)

公費でのリゾート開発の裏にある、津村建設と第三セクターの癒着。工事の利権という甘い汁に、政治家や官僚たちも群らがるうとしている。まるで砂糖に集る蟻のように。

その計画を滞りなく進めるために、邪魔な島民たちを陥れる使者として、望月はこの島に来たのだ。

今はまだ何も知らないだろうが、柊杞たちにとって自分はむしろ敵なのだ。

(悪いがそれが、俺の今回の仕事だからな)

望月の決意は変わらない。弱肉強食は、自然界だけの理でないことをよく知っているからだ。しかし、記事を上げる期日まではまだ一カ月近くあり、取材は急ぎの仕事でないのも事実。

(まっ、予定外だが、多少ここでのんびりするのでもいいか)

御馳走になった昼食も、茶請けの菓子も美味しかった。

それにここに滞在すれば、煽って書くに相応しい記事のネタがもっと拾えるかもしれないと、望月は考えを切り替えることにした。

そのまま三日間、望月はこの島でするずると過ごしていた。

島に立ち寄る漁師や、真珠の加工場で働く人たちに話を聞いたり取材も行ってはいたのだが、柊杞への信仰は本当に厚く、面白みのないコメントしか結局得られなかった。

一方柊杞は、時間が空くと望月を呼び出し、東京での庶民の生活の様子などを聞きたがった。食事を一緒にの部屋で取ることもあった。

今朝も一緒に朝食をすませた後、望月はそのまま本殿に残っている。

柊杞自身にこんなにも気に入られてしまったのだから、佐吉も望月にとやかく言うのはもう諦めたようで、今日は完全に二人きりで話をしていた。

望月の話に、高座に座る柊杞は瞳を瞬かせる。

「地下に電車が走っているというのか？ 私にはもう想像もできない。それにそんなにたくさん走っているなら、東京の地下は穴だらけになってしまうぞ」

「実際穴だらけなんですけど、それは設計者がなんとか考えて上手くやってるんですよ」

適当でどんないい加減な話でも、柊杞は真剣に聞き入っている。

時に驚き深い感心の声を上げたり、異世界の話に興味を引かれる子供のように、その瞳はキラキラと輝き楽しそうだった。

ひとしきり話すと、柊杞がおもむろに立ち上がった。

「望月、デジカメはあるな。錦鯉を撮りにいくぞ」

「はいはい」

望月も立ち上がり、デジカメを持ってそれに続く。デジカメでの撮影も、今や柊杞の趣味になりつつあった。

しかし、
(ん？ どうした？)

柊杞は部屋から出ようとせず、閉まったままの襖の前で立ち止まった。不審に思う望月に、柊杞は振り向き声をかけてくる。

「何をしている。佐吉がいないのだから、早く戸を開けないか」

(――俺が襖を開けるのを待ってたのかよ？)

思わず脱力したくなるほど、ひどく呆れた。

どうやら柊杞には、自分で戸を開けるという習慣すらないらしい。

いつもなら側に控えている者によって自動ドアのように戸が開くのだが、今は当然望月が開けるものと柊杞は思ったのだろう。

『俺様』どころか『神様』だ。感覚がもう常識の枠を越えている。

そんな柊杞とともに庭に移り、柊杞は池で優雅に泳ぐ錦鯉を望月のデジカメで撮り始めた。

柊杞の態度は極めて横柄だし、整った顔は感情がはっきりとは表れにくいだが、それでもこうして話していると、ちゃんと伝わってくるものがある。

時折こちらに見せる柊杞の笑顔は、荒んでいるという自覚のある望月にとって、一時の癒しになっていることには違いなかった。

あまりにも嬉しそうで、望月はついめったに出さない親切心を出した。

「東京に帰ったら、写真をプリントしてこちらにお送りしますよ」

当然喜ぶと思ったからこそそう言ったわけだが、柊杞はたちまち不機嫌な顔になった。

「べつにその必要はない」

「え？」

「お前は、東京に帰りたいのか？」

「...いえ、そーゆー意味じゃなくって」

「ならいい。『帰ったら』などという仮定の話はするな」

友達のいない孤独な神様は、よほど望月にこの島から帰ってもらいたくないのだろう。

(気持ちは察するけどな...)

――しかし、無論そういうわけにはいかないのだ。

そして四日目。

さすがにこのままずっと柊杞の相手をし続けるわけにもいかず、望月は今日こそは夕方の船で帰ろうと思っていたのだが、昼過ぎからだんだんと天候が崩れてきた。

台風とまではいかないが、どうやらかなり強い低気圧が近づいてきているらしい。

海の交通は、天候に大きく左右される。わかっていたら、昨日のうちにさっさと島を後にしていたのだが、ここではテレビもなく新聞すら届かないのだから望月には知りようもなかった。

外は風が強いが、まだ雨は降っていない。でもいつ大雨が降りだしてもおかしくない状態で、客間の窓はすでに雨戸も閉ざされ、それが風に揺れてゴトゴトと大きな音を立てている。

外にも出られないとなると、ここは本当に退屈だ。強風の中を無理して外に出たところで、もともとこの島に遊べるような場所は一切ないのはわかっている。

与えられている部屋で、手持ちのもので暇潰しするにしても、携帯はもちろん圏外。ダウンロードしてある携帯ゲームも飽きてしまえば、もうお手上げだ。啞え煙草でゴロリと、畳の上でふて寝する以外何ができよう。

しかも、こういう暇な時に限って柊杞からの呼び出しもなかった。

今日は食事も朝から別だったから、離れにいる望月には、柊杞が今どうしているかも窺い知ることにはできない状況だ。

望月は、ふとデジカメを手に取り、柊杞の写した画面を見始めた。

草花や景色、錦鯉などの写真だが、アングルが曲がっていたりと、神様の人間らしさが感じられる。

望月は別のSDカードに保存してある、自分が最初に撮った三枚の写真を見てみた。

柊杞と初めて会った時の、滝壺での写真だ。

濡れた湯帷子から透ける白い肌。男とわかっているけど、その美しさに思わずシャッターを切ってしまったくらいだ。今、こうして改めて画面で見ても、なんとも言えない色気が漂っている。

普段の柊杞の気高さや清楚さとのギャップには、無性に煽られた。

(いっそ、これで抜くか?)

夜遊びができず、すっかり欲求不満に陥っている自分を、望月は自嘲的に笑う。

ここでは本能の三大欲求である食欲と睡眠欲は完璧に満たされるが、性欲だけはまったく発散の機会がない。これまで女に不自由したこともないのに、このままでは右手の世話にならねばならないかと思うと情けない限りだ。

(ああ...東京のネオンが恋しい。帰ったら、さっさと記事を仕上げ、入った金でパーツと派手にキャバクラでも貸し切ってやるっ!)

そこに、

「失礼します。夕食をお持ちしました」

年老いた着物姿の女中が、膳を運んできた。

「ありがとうございます」

(女がいるってたって、さすがにこれじゃ一勃ちようがないぜ)

食事はいつも一流旅館のような豪華さだが、本当に一流旅館ならここまで深刻な女旱を体験しなくてすむはずだ。

観光客だって従業員だって、男としてのこのフェロモンで、狙った女を落とせないわけがないと望月は自負している。

しかし、この観之島ではそのフェロモンももはや無用の長物。

何しろ若者は柊杞と望月のみ。柊杞が話し相手に自分を切望する気持ちもわかるというものだ。

虚しさに包まれながら、望月は離れの客間で一人で食事をすませた。

しばらくして、先程の年老いた女中がそれを下げにきたのだが、彼女は大きくため息をつき浮かない顔をしている。つい気になって、望月は尋ねてみた。

「どうしたんですか？」

「柊杞様が、また御体調を崩されたようなんです。食欲もあまりないようですし...心配で。今日は望月さんともお話しにならないなんて.....あんなに楽しそうにしてらっしゃったのに」

確かに昨日までは一緒に話している時は元気そうであったし、どうも腑に落ちない。

そういえば柊杞は、来た時も体調を崩していたことを思い出す。

「いったいどこがお悪いんですか？」

「それが、私どもにはよくわからないんですよ。柊杞様が理由をお話ししてくださらないので。いつもなら滝に打たれたりしてらっしゃるのですが、今日は生憎こんな天気ですし、御寝所で横になられていらっしゃいます」

「そうですか...」

(本人に聞くのが一番早いんだろうけどな)

現人神の、謎の病気に興味が湧く。記事のいいネタになるかもしれない。

見舞いに行きたいと言おうとしたが、これまでの経験から、具合の悪いという柊杞にすんなり会わせてもらえるはずもないとわかっていた。

ならばと、望月はニヤリと口端を上げた。

幸いにも今日までの四日間、いろいろこの屋敷の敷地を歩いたので、柊杞の部屋の場所もおおよそだが掴めていた。

外はすっかり日も暮れ、強風で揺れる木々が唸りを上げています。雨もポツポツと大粒のものが降り始めていた。望月は急いで暗い渡り廊下を通り本殿へと進む。

柊杞の部屋は、屋敷の一番南側と思われた。

人目を避け、足音を立てないまるで泥棒のようなこうした侵入も、これまであこぎな取材をしてきた望月には慣れたものだ。

まあ、多少音を立てても、雨戸を揺らす風と、叩きつけるように降り始めた雨音に掻きかき消されてしまうだろう。

望月は屋敷の南側へと進む。廊下は、角に薄暗い電灯が灯っているだけで、慣れた者でなければ足下が覚束ないほどかなり薄暗い。望月はライターを使って周囲の様子を確認しつつ歩いていった。

女中たちは食事の後始末で北側の台所の方にいるようだ。途中、佐吉が本殿内を見回るように廊下を向こうから歩いてきたが、物陰にさっと隠れた望月にはまったく気がつかず通り過ぎていった。

そして到着した南側。その一角が、やはり目的の柊杞の居室のようだった。

柊杞の部屋は一室ではなく、いくつかの和室を贅沢に使っているようだ。

一部屋が二十畳くらいあり、ライターの明かりだけでは暗くてよく確認できなかったが、床の間は剥製や掛け軸などで豪華に飾られていた。

なん部屋分かの畳の上を通り過ぎ、やがて襖の間から明かりが漏れている部屋を見つける。

どうやらここが柊杞の寝所のようだ。襖をそっと少しだけ開け、透き間から中の様子を窺った。

やはり、そこに柊杞はいる。布団に横になってはいるが、寝苦しいのか何度も寝返りを打ち、ため息をついている。眠ってはいないようだ。

望月は襖を開け、声をかけた。

「――柊杞様」

よほど驚いたのだろう。いったい何事かと、柊杞は跳ね起きた。そして瞳を見開いて、こちらを見ると、わなわなと震える。

「もっ、望月っ？ お前がなんでここにいるっ？」

「お静かに、願います」

戦慄く柊杞を宥め、望月は自慢の甘いマスクで微笑んだ。

「柊杞様と、お話がしたくて来ちゃいました」

美しい竹を描いた寝間着の浴衣に身を包む柊杞は、キョトンとした顔で望月を見つめた。

「私と...話を？」

四日間滞在しているうちに、すっかり柊杞は望月に心を許してくれているようで、こんなふうに突然現れても佐吉を呼ぶことはしなかった。

だが、嬉しそうというよりは、すぐに暗く表情を曇らせた。

「...そうしたいのは、やまやまだが.....私は...今、とても具合が悪いのだ」

それで寝苦しかったのか、着崩れた浴衣の胸元が開いていて、白く滑らかな胸元が覗ける。

望月は思わずゴクリと唾を呑み込んだ。

これは、病人特有のしどけない色気というものだろうか。

男相手にそんなものを感じるとは、もはや本格的に欲求不満なのかもしれない。

滝壺でのなまめかしい湯帷子の姿まで思い出すと、一気に下半身の血流が増すのを感じた。

(やばいっ、とにかくまずは取材のネタを拾わねーと)

自分をごまかすように望月は切り出した。

「いったいお身体の、どこがお悪いんですか？」

「.....」

望月の問いかけに、柊杞はただ俯いてしまった。いつもははっきりとした態度を好み、何事も堂々と告げてくるのに、今回ばかりは珍しく曖昧な態度のまま言いたがらない。

(こりゃ、絶対何か重大なコトを隠してるな)

記者としての勘でそう確信した。

「何かあるのですしたら、相談にのりますけど？」

女をクドく時のように丁寧に、心の底から親身になった振りをする。タラシとして、こういうのは得意

だった。

柊杞の白い手に、優しく労るように自分の手をそっと重ねると、ビクッと驚いて柊杞は手を引くが、やがて小さな声が聞こえた。

「……気分がすぐれない時は、神通力が消えてしまう」

（じっ、神通力い？）

顔を上げないまま告げられたそれに、望月は思わず嘔き出しそうになったが、ここで笑ってはせっかく得た信頼を失ってしまう。

柊杞は本当に真剣かつ深刻そのものなのだ。

「このところ、たびたびそんな状態になってしまい、もしやこのまま神として力が失われてしまうのかもしれないと思うと、私はどうしていいかわからない…。こんなことは、迂闊には言えないだろう。この私が、神としての資格を失いそうなのだ」

どんな神通力かは知らないし、訊いたところでどうせ本人の思い込みだろう。自分を神様だと思い込んでいる人間には、もはやなんでもアリな気がしてくる。

とりあえず、落ち込んでいる柊杞を望月は宥めた。

「でも、体調がよくなればその力は戻るんですよ？ だったらきっと大丈夫ですよ」

「滝に打たれたり、気晴らしをすればよくなるのだが…」

それでよくなる病気とは、ますます不可解だ。

「それで、いったいどんな症状なんです？」

尋ねてみると、

「…それは、言う必要はない」

柊杞は口を閉ざした。

神通力を失いそうだと、柊杞にとっては己の根底を揺るがすように深刻な悩みを告げてきたのに、肝心な病気の具体的な症状は言いたくないらしい。

だが、望月は布団の中の柊杞の脚がモジモジと動いたのを見逃さなかった。

（もしかして――！）

望月はたかが四日間暮らしただけで、ここでのストイックな生活に身体が欲求不満になってきていた。

柊杞はまだ二十一歳という若さだ。まさに犯りたい盛り頃の肉体が、こんな暮らしに満足しているわけがない。

少しからかい半分で、望月は訊いてみた。

「柊杞様は、女性を抱いた経験はありますか？」

「なっ、ななっ、何を言うっ」

柊杞は全身を震わせ、一気に耳まで真っ赤になる。こんなにもあからさまに動揺するとは、どうやらまったくないようだ。

（この年でまだ童貞くんかよ。神様って一のは、ほんと哀れだよな）

昔なら、そういう役どころの専門の女官などがいたのかもしれないが、現代ではまずありえないことだ。

いっそ結婚するにしても、今時の若い女性が望んでこのド田舎の島に嫁に来てくれるとは到底思えなかった。まして相手は神様だ。仕来りもうるさそうだ。

ならば、肉体的欲求のみを慰めてくれるような商売の女性を招けばいいのだろうが、あのお堅い年寄りたちがそんな気を利かせてくれるはずもない。

可哀想な神様は、性欲を持て余し、しかし発散することもままならず、体調を崩すほど追いつめられてしまったのだろう。

望月は柊杞の初心な反応を目の当たりにして、抑えていた雄の本能が完全に目覚めた。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>